

平成 26 年度狂犬病予防注射業務関係者研修会を開催

平成 26 年度狂犬病予防注射業務関係者研修会が 11 月 19 日（水）新潟県自治会館講堂において関係者 177 名が出席して開催された。

主催者として、公益社団法人新潟県獣医師会 楠原征治会長理事、共催者として、新潟県福祉保健部 藤田伸一生活衛生課長から開会の挨拶があり講演に入った。

行政説明では、生活衛生課の阿部久司 動物愛護・衛生係長が狂犬病の発生状況について、発症すれば神経症状を呈し 100%死亡し発症後の有効な治療法はないこと、潜伏期は 1～3 ヶ月程度で毎年全世界における死亡者数は、約 55,000 人（10 分に 1 人の割合で死亡）でその多くはアジア及びアフリカ地域が占める。又、人の狂犬病の原因は 99%が犬からの感染（咬傷）であること。犬の登録及び狂犬病予防注射接種状況について、平成 25 年度の県全体の注射接種率は、92.8%であるが地域別でみると郡部では高く、都市部（新潟市）で低い接種率であった。最後に県の取り組みとして①県民に対する普及啓発、②犬を譲渡した飼育者への普及啓発、③動物取扱業者に対する指導、④湾岸地域における犬の管理の徹底について詳細な説明をされた。

続いて、県獣医師会事務局から市町村担当者に対して①平成 27 年度狂犬病定期集合予防注射料金改定（2,550 円から 2,650 円への値上げ）、②狂犬病予防業務関係事務委託手数料についてご理解と前向きな検討をお願いした。

続いて、狂犬病臨床研究会 理事 沼田一三 先生から「あらためて考える狂犬病対策の必要性」と題してご講演をいただきました。

狂犬病の歴史と概要から入り、感染経路は感染した動物の咬傷からウイルスが侵入し⇒末梢神経を 15mm/日の速度で上昇⇒脳に到達し増殖して発症に至る。よって、咬傷部位により発症までの時間が異なるが何れにしても脳に到達し増殖する前に暴露後ワクチン接種で抗体価を上げることが重要となること、又、なぜアジア及びアフリカ地域で死亡者数が多く占める理由として貧困（暴露後ワクチン接種ができない）も一因と考えられる。次に台湾での狂犬病発生事例では、“イタチアナグマ”が 276 頭、その他で犬（イタチアナグマに咬まれた生後 45 日の子犬 1 頭が陽性、その後安楽死処分）が確認された。しかし、他の野生動物（“タヌキ”、“ハクビシン”等）に陽性が出ないのか？ 又、出ないとすればその理由は？が現時点では解明されていないこと。台湾株は、中国での流行株とは異なっており遺伝子解析の結果で 3 つの系統（中部、南部、東部）に分かれている。このことは、数十年以上前から“イタチアナグマ”による狂犬病が流行していたと推察される。更に、台湾での狂犬病発生事例を教訓に日本国内でも地道な野生動物の疾病モニタリング調査が必要であること。狂犬病対策と動物愛護の関係では、動物愛護面が強調される傾向にあるが動物由来感染症（狂犬病対策を含む）の対策強化により動物の健康と安全保持にもつながり、その結果として『ヒトと動物の共生』が確立されることを解説し、県・市町村・獣医師会の三者が各々の役割を的確に果たすことの必要性を強調された。



研修会の様子